

有斐閣新書

仏教文学の古典 (上)

日本人の生死観の典型を

如実に物語る仏教文学の古典から

日本靈異記・往生要集・源氏物語

今昔物語集・歎異抄・正法眼蔵・

日蓮の書簡などを選び出し

それぞれの作品の魅力と

古典のもつ永遠の生命力とを

鮮かに描きます

紀野二義・三木紀人 編

有斐閣新書

教文学の古典
(上)

一義・三木紀人編

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

● 編者紹介 ●

紀野一義

1922年、山口県に生まれる。1948年、東京大学文学部印度哲学科卒業。現在、宝仙学園短期大学教授。真如会主宰。著書に、『禅く現代に生きるもの』（NHKブックス）、『現代に生きる仏教』全3巻（筑摩書房）、『仏のこころ詩の心』（講談社）、『法華経の風光』全5巻（水書房）ほか多数がある。

三木紀人

1935年、兵庫県に生まれる。1966年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。現在、お茶の水女子大学助教授。著書に、『雑談集』（三弥井書店）、『方丈記 発心集』（新潮古典集成）、『方丈記』（日本古典新書、創英社）ほか多数がある。



有斐閣新書

仏教文学の古典（上）

1979年5月20日 初版第1刷印刷

1979年5月30日 初版第1刷発行 ©

編者	紀野一義
	三木紀人
発行者	江草忠允

発行所 株式会社 有斐閣

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370

● 京都支店 [606] 左京区 田中門前町 44

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

共立社印刷・和田製本

★定価はカバーに表示してあります

まえがき

この本は、従来書かるべくしてなかなか書かれなかった、仏教文学古典の解説への、魅力あふれる挑戦である。

こういう種類の本は、おおむね一人の執筆者によって書かれ、そつなくまとめられるのが常であつた。ところが、この本はそれをしなかった。数人の執筆者が、全く独自の立場から、自由に書いた。書くことについての制約は、全くなかった。お互いに相談することもなかった。原稿が出来上がってくるまでは、どんなものが書かれてくるか、予想さえもできなかった。

今出来上がった各章を読むと、どの章も、各執筆者の強烈な個性が鮮やかに露呈されていて、単なる紹介や解説の域をみごとに飛び越え、踏み越えてしまっている。

しかも、それぞれの章に、それぞれの文学の持つ永遠の生命のごときものが輝いている。

なるほど、千年の歳月を越えて生きつづける根強い生命力がこれらの古典にはあるのだなと、読む者を納得させるていの力がある。そして、それぞれの章が、未来に向かってさらに新たな展開をしてゆくであろうと思わしめる一種の烈しい意志を感じさせる。

文学作品というものは、書かれてしまい、世に出てしまったのちは、著者の手を離れて勝手に歩き出すものである。

そうではあるが、同時に、それらの作品を書いた人を、また、それらの作品の中に描かれた人間たちの持っている生々しい存在感を、後世のわれわれに、思いもかけぬ角度から、恐ろしい新鮮さで、語りかけてくる。

そこに現われてくるのは、紛れもない日本人の生きざまである。仏教文学というとき、そこに描かれる人物は、すべて、仏教に深くかかわっている。その信心が深かろうと、浅かろうと、その宗教的な欲求は、その人間の命の奥深いところに根差しているに違いない。人間の命の奥深いところに、生きたいという欲求、あるいは、死にたいという欲求の根源があるとすれば、それらの人間の生き方は、まさしく、日本人という人種の生きざま、死にざまを、如実に物語っているに相違ない。私たちが仏教文学にひかれるのはそういう意

味からである。

しかし、そういう得がたい資料も、読み方しだい、取り扱う角度や姿勢しだいでは、全く死物と化すおそれもある。

この本の各執筆者は、その担当の分野において、なみなみならぬ情熱を注いできた人ばかりである。その情熱はこの本においても十分に発揮されている。すなわち、単なる仏教文学古典の紹介・解説にとどまらず、典型的な日本人の生きざま、死にざまを、鮮やかに描き出して見せている。

この本の読者が、さらに進んで、それぞれの古典の原文に取り組み、日本人としてのありようを、自分なりに掴んでゆくところにまで進まれることを、私たちは願ってやまない。

昭和五十四年四月

編 者

● 執筆者紹介（執筆順）—————

春日 和 男（かすが かずお）

北九州大学教授

石 田 瑞 麿（いしだ みずまる）

東海大学教授

稲 賀 敬 二（いなが けいじ）

広島大学教授

三 木 紀 人（みき すみと）

お茶の水女子大学助教授

秦 恒 平（はた こうへい）

小説家

紀 野 一 義（きの かずよし）

宝仙学園短期大学教授

目次

1 日本靈異記……………春日和男 1

1 古典としての『日本靈異記』 2

2 『日本靈異記』の内容 その1——景戒を中心に—— 9

3 『日本靈異記』の内容 その2——信仰を中心に—— 17

4 『日本靈異記』の文学性ということ——結びにかえて—— 25

2 往生要集……………石田瑞麿 27

1 『往生要集』の念仏 28

2 『往生要集』の文学 40

3 枕草子と源氏物語……………稲賀敬二 55

1 『枕草子』の世界 56

2 『源氏物語』の世界 66

3 『源氏物語』の人物たち 73

4 『今昔物語集』と往生伝 三木紀人 83

——三つの人物像をめぐる——

1 『今昔物語集』とその周辺 84

2 増賀の狂行 89

3 保胤の涙 97

4 源大夫の西行 106

5 梁塵秘抄と山家集 秦 恒平 113

はじめに 114

1 『梁塵秘抄』と『山家集』とを同時に扱うおもしろさ 114

2 『梁塵秘抄』の信仰の世界 121

3 今様精神と西行 129

4 魅力あふれる十二世紀人 137

6 歎異抄と親鸞の書簡……………石田瑞曆 147

1 『歎異抄』 148

2 親鸞の書簡 160

7 正法眼蔵と正法眼蔵随聞記……………紀野一義 175

1 『正法眼蔵』 176

2 『正法眼蔵随聞記』 191

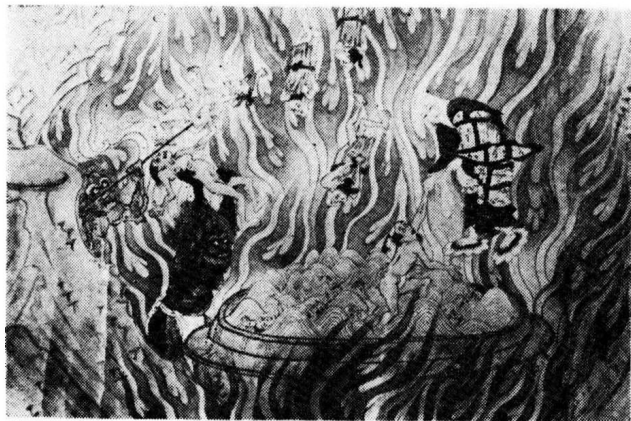
8 日蓮の書簡と蓮如の御文……………紀野一義 201

1 日蓮の書簡 202

2 蓮如の御文 216

参考文献……………229

1
日本靈異記



地獄繪圖（『矢田地蔵縁起繪卷』部分）

1 古典としての『日本靈異記』

● 日本最古の説話集は仏教説話集

ここに述べようとする『日本靈異記』という書物は、上・中・下三巻からなり、漢文（特にその多くは変則な和化漢文）で書かれ、わが国の仏教説話集の始祖にあたるものであるといわれている。のみならず説話文学という広い立場からも、最古の地位にあるものである。『日本靈異記』以前の世に顯れた古典、たとえば、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などに見られる伝説・口碑に関する記述とはちがって、始めて一つのまとまった形の中に、仏教という思想・宗教の背景をもって、専らに編集されてあるということを、第一の特色とせねばなるまい。

思うに、新興宗教としての仏教が、広く大衆に布教され、人心を感化するためには、このような説話的なジャンルとして、集の形をとらざるを得なかったであろうし、説話とはいえ、雄略朝以来の編年体の形をとって、奈良時代、特に聖武朝に重点をおき、淳仁・称徳兩朝を経て、平安時代に入り、嵯峨朝にいたることなど、その構成上にも用意があったと見られ、きわめて重視されてよいことであろう。

●書名と撰述者

『日本靈異記』の原名は、上巻序に「日本国現報善惡靈異記」とあって、上・中・下各巻頭にも、右の書名が見える。「日本靈異記」または単に「靈異記」という呼称は、その省略形であり、平安時代から省略形が用いられていた。読み方にもリョウイキ・レイイキの両方があるが、中世以後の資料にも二つながら見えているので、どちらでもよいことになる。仏教用語は、古音の呉音が用いられることが多いから、リョウイキが本来であつたともいえる。書名の意味は後に述べる。

さて『日本靈異記』の著者であるが、説話は、元来、採取編集されるのが常であるから、撰述者ということになる。この撰述者は、奈良の薬師寺の僧、景戒きょうかいという人であつたことが、上・中・下各巻の書目のつぎに「諾楽右京薬師寺沙門景戒録」と見えていることによって明白である。下巻の末にも「伝燈住位僧景戒」とあって、僧位五階の中の第四位を得ていたことがわかり、それは、延暦四（七八五）年十二月三十日のことであつたとは、自叙によって明らかである。ただし、この人の伝記は、本書の内容から想像するだけで、その多くは全く不明である。生没の年などもわからない。『日本靈異記』の中で、もっとも自己を述べているところは下巻第三十八縁の後半の部分であるが、その自叙について伝記を推定すると、つぎのようである。

延暦六（七八七）年ころには、『靈異記』の初稿をひとまず撰し終えたもようである。心境に一転機が生ずるようになる。同年九月四日の夜および翌七年三月十七日の両度に夢を得て、

それらが、観音の慈悲による救世の表象となり、また一つは、延暦十四年十二月三十日に、前述の伝燈住位という地位を得る前兆となる。延暦十六年十二月十七日、男子を失い、同十九年一月十二・二十五兩日銅馬が斃死する。

以上それぞれに不吉な前兆があるわけであるが、伝記の年月としては、これをもって終りとする。さて、景戒は、男子があつたから妻帯したことがあり、私有財産もある在俗の出身であることがわかり、やがて起用されて名利薬師寺の僧となったものと思われる。つまり、ここに自度僧の出自である可能性が強くてくるのであるが、これらのことを含めて撰述者の身上について、内容的な推測を後に行なうことにする。

●『日本靈異記』編纂の動機

『靈異記』には、前述のように、上・中・下三巻にそれぞれ序文があつて、それに照合すれば、その編纂について、景戒の心情を知ることができる。ただし、中・下の両巻にある序文は、誤脱が多く、十分な意をうるに困難な面もあるが、最近、来迎院本『日本靈異記』の発見によつて、多少とも、その文章を正しく復元することが可能になった。まず上巻序では、

「ここに諾楽の薬師寺の沙門景戒、つらつら世の人を瞰るに、才好くして鄙なる行あり（学問器量が優れていて卑しい行為が目立つ）。利養を翹み、財物に貪ること、磁石の鉄山を挙して鉄を嘘ふよりも過ぎ（利益をふやすことを願つて、財宝をえようと夢中になるさまは、磁石が鉄

鉢山の鉄を余すことなく吸いつけようとする以上で、他の分を願ひ、己が物を惜しむこと、流頭の粟の粒をくだきて糠を啖むよりも甚だし（確が粟粒をひいて、食用にしない糠まで呑みこむよりもひどい）。

とあるように、世情・人心の腐敗・墮落を説き、下巻序では、

「仏の涅槃したまひしより以来、延暦六年歳の次り丁卯に迄るまで一千七百二十二年を遷たり。正像の二つを過ぎて末法に入れり。」

とあるように、仏滅後正法五百年、像法千年を過ぎて、今や末法万年の時期に入り、さらに

「夫れ華は咲みて声無く、雞は鳴きて涙無し。代を觀るに、善を修する者は石の峯の花の若く（少なく）、惡を作す者は土山の毛に似たり（多い）。因果を繕はずして罪を作すは、目無き人の虎の尾を履むが比く、名利を甘び嗜みて生を殺すは、鬼に託へる人の毒ある蛇を抱くが疑し（いずれも危険きわまりない）。」

と末世觀による不安を述べているが、これらが一つの原因ともなつて、大衆に訴ふる動機を作つたともいえる（ちなみに下巻の序文についての訓読は、昭和五十二年、来迎院本による復原を試みた際に、九州大学大学院学生であつた秋吉望・崎村弘文両君の解説したものを、補訂して掲げた。ここは従来不明とされていた箇所である）。

たしかに聖武天皇は、中巻序文のいうように、「大仏を造り長へに法種を紹ぎ、鬚髪を剃り、袈裟を着、戒を受け善を修し、正を以ちて民を治めたまひき」とあるような、仏教政治家と

参考文献

7

穂達・俊量等編『山本版正法眼蔵』永平寺蔵版

大久保道舟校訂『道元禪師全集』春秋社、昭和五年／筑摩

書房、昭和四四～四五五年（二冊）

衛藤即応校訂『正法眼蔵』三冊、岩波文庫、昭和一四～一

八年

西有穆山『正法眼蔵啓迪』代々木書院、昭和五年／大法輪

閣、昭和四〇年（三冊）

増谷文雄『現代語訳正法眼蔵』八冊、角川書店、昭和四八

～五〇年

西尾実・水野弥穂子他校注・訳『正法眼蔵弁道話・正法眼

蔵隨聞記他』（古典日本文学全集）筑摩書房、昭和三

七年

和辻哲郎校訂『正法眼蔵隨聞記』岩波文庫、昭和四年

古田紹欽訳『正法眼蔵隨聞記』角川文庫、昭和三五年

水野弥穂子訳『正法眼蔵隨聞記』筑摩書房、昭和三八年

紀野一義『ある禪者の夜話』筑摩書房、昭和四六年

8

立正大学日蓮教学研究部編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延

山久遠寺、昭和二七～三四年

兜木正亨・新間進一校注『親鸞集・日蓮集』（日本古典文

学大系）岩波書店、昭和三九年

紀野一義編『日蓮』（日本の名著）中央公論社、昭和四五
年

戸頃重基・高木豊校注『日蓮』（日本思想大系）岩波書店、

昭和四五年

大野達之助『日蓮』（人物叢書）吉川弘文館、昭和三三年

鈴木一成『日蓮聖人遺文の文献学的研究』山喜房仏書林、

昭和四〇年

茂田井教亨『日蓮書簡に聞く』教育新潮社、昭和四一年

田村芳朗・宮崎英修編『日蓮語録』（講座日蓮）春秋社、

昭和四八年

稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』法蔵館、昭和二二年

稲葉昌丸校訂『御一代記聞書』岩波文庫、昭和一七年

笠原一男・井上鋭夫校注『蓮如・一向一揆』（日本思想大

系）岩波書店、昭和四七年

稲葉昌丸編『蓮如上人行実』法蔵館、昭和三三年

竜谷大学編『蓮如上人研究』百華苑、昭和三三年

笠原一男『蓮如』（人物叢書）吉川弘文館、昭和三八年

大原昌実『蓮如語録に聞く』教育新潮社、昭和三九年

●『日本靈異記』撰述の時期

景戒が『靈異記』をいつ撰述したかという問題は、その内容に照合し、また、直接示された年代および諸事象の時代的背景によって推定するより他ない。撰述の年代に関する上限は、下巻序に、前述のごとく延暦六年の記述があつて、この序文のできた時期を暗示する。また上述の通り、もっとも新しい日付は、景戒所有の飼馬が斃死した延暦十九年一月二十五日ということになる。しかるに下巻第三十九縁というところに「今平安宮疏十四介了治天下賀美能天皇」とでている部分を仮に「今、平安宮にはば十四か年（あるいは、十四か年通して）治めたまひし神野（嵯峨）天皇」のように訓めば、嵯峨天皇十四年すなわち弘仁十三（八二二）年となり、これが最下限になる。その他『靈異記』には、白髪部という姓（上二九、下七）、加賀国設定以前の越前国加賀郡という呼称（下一四・一六）等があつて傍証をなすものである。延暦六年から弘仁十三年までには三十七年の差があつて、一旦完成した初稿本に下巻の後半（特に二四以後三八・三九）などをしてに追補して、完全な形として編集を終わつたのは、弘仁十三年のころであつたと見るのが穩やかであらう。

今日の『靈異記』通行本では、上巻に三十五話、中巻に四十二話、下巻に三十九話、合計百十六話の説話が集録されているが、内容や掲載位置に諸本によって多少の出入りがあり、特に上巻第四「聖徳太子 異ちがひき表を示したまふ縁」と下巻第三十八「災と善との表相まづ現はれて、後に其の災と善との答を被る縁」、同三十九「智行並び具する禪師、重ねて人の身を得て、